後　記

鬱蒼とした本の森――そこをくぐり抜けると大きな窓に突き当たり、その横には机と二つの椅子がある。窓は大きいが光はかろうじて机と椅子に届く程度である。森は果てしなく深い。ようこそ蔭山宏研究室へ。

学者が本をたくさん持っているのは当たり前だが、しかしその数は尋常ではない。太陽光も電灯の光も届かない研究室内部。林立した本棚（本来こんなに本棚があってはならないはずだが、ここは治外法権か）の陰から熊やリスやドワーフが現れたとしても誰も驚かない――そんな不思議な空間、そこが蔭山ヴァルト（ワールド）であり蔭山ヴェルトである。蔭山先生はここで深く思索に耽られ、その魅力的な文章を紡ぎだされてきたのである。

もっとも、蔭山先生はご自宅でも研究されるのだろう。そしてそこも本で埋め尽くされていると思われるが、その要塞に近づけた人間はいない。一応、住所は存在する。電話番号もある。だが、その電話が通じたためしはない。（それだけに、蔭山先生が最近携帯電話を購入され、Eメールを使用されるようになったとの噂には誰もが耳を疑った。）

これ以上引きのばすべきではないが、これが私の蔭山先生像である。まさに、学問一筋の人生を歩まれた孤高の研究者。その蔭山先生が平成二三年三月末日をもって本塾法学部を定年退職される。三田からあの森がなくなると思うと寂しい気持ちになる。だが、先生はこれからも要塞を拠点として人びとをインスパイアされ続けるであろう。そこでまずは、先生の長年にわたる塾内外でのご活躍とご貢献に対して感謝の意を表明したい。そしてそれぞれの思いを抱きながら蔭山先生のご退職記念号にご執筆いただいた塾内外の先生方に心より御礼申し上げたい。

さて、以下において、ごく簡単に本記念号の刊行に至る経緯について述べさせていただきたい。肩書からお分かりいただけるとおり、私は本記念号の編集担当者であり、世話人である。しかしこれは名ばかりのことで、実は私はほとんど仕事らしい仕事をしていないことをまずはここに告白しなければならない。実際にこの記念号の刊行に際して中心的な役割を果たした方々は誰かというと、まず筆頭にあげられるのが蔭山先生ご自身である。読者はお気づきかと思うが、この記念号には写真がない。掲載順も通常の記念号とは異なる。これは蔭山先生の強いご意向によって決まったことである。また、執筆依頼者リストも先生がつくられ、各々の執筆者への進行状況の確認の連絡まで先生が

なさった。そして極めつけに、ご略歴・主要業績目録も先生ご自身が作成された。私の役割といえば、デリバリー・ボーイのように、いただいた情報を右から左に伝えるだけだった。まったくの役立たずぶりをひたすら恥じ入る次第であるが、このように先生ご自身が仕切ってくださったゆえ、蔭山先生カラーが頗る濃厚に反映された論文集ができたのではないかとも思っている（まったく言い訳にはならないが）。

執筆者確定後は、執筆依頼状が作成され郵送されたが、この作業をなさったのは法学研究会編集室の小野裕子さんである。また、法学研究編集委員会編集主任の有末賢先生は塾内の社会学の先生方にお声をかけてくださり、その部門のコーディネートをしてくださった。そして、校正などの編集作業を行われたのは慶應義塾大学出版会の村山夏子さんである。皆様に心より感謝を申し上げたい。

このような無能な世話人で衷心忸怩たるものがあるが、ともあれ多くの方々のご協力によって蔭山宏先生退職記念号が刊行の運びとなった。本当に喜ばしいことであり、重ねて先生と執筆者と編集に携わられた方々に御礼申し上げたい。

平成二三年一月

編集担当委員・法学部教授　堤　林　　剣